

戦後81年、教訓は何か？

～「新しい戦前」にさせないために～

衆議院議員 長妻昭事務所作成 2026年夏版

荻外荘会談

～対米戦争の流れを止められず 近衛首相辞任へ～

・ 開催：対米開戦の2ヶ月近く前、1941年（昭和16年）10月12日（日曜日）午後、杉並区荻窪の自宅荻外荘にて（近衛文麿首相50歳の誕生日）

・ 出席：近衛文麿首相、豊田外相、東條陸相、及川海相、そして鈴木貞一企画院総裁

・ 狙い：翌々日の14日に予定されていた定例閣議の前に対米戦争回避への道筋を固めてしまおうというもの。一般閣僚や各省庁次官など出席者の多い閣議では議論しにくい問題を政府首脳部の中枢だけで先に合意しておきたかった。

実際に対米戦争が始まれば舞台は太平洋。戦うのは海軍となる。海軍が米国との戦争はできないと断言すれば陸軍がいくら開戦を望んでも不可能となる。海軍は対米開戦を望まない姿勢だった。米内光政海相「（対英米戦争に）勝てる見込みはありません。大体、日本海軍は米英を向こうにまわして戦争をするようには建造されていません」（1939年五相会議）

・ 経緯：当日午前8時、海軍首脳会議を開き、午後の荻外荘会談では、①近衛首相辞任を防ぐ、②対米開戦でなく外交交渉を進める、③会議の内容は門外不出と釘を刺す、この3点を及川海相の取るべき立場として確認された。しかし、午後の荻外荘会談では及川海相はこの決定を踏まえ「対米開戦は首相一任」としてしまう。海軍の対米開戦反対発言を期待していた近衛首相は対米開戦を止める自信を失い辞任に向かう。

荻外荘会談 ドキュメント

～「海軍の肚が決まらない」VS「陸軍の撤兵ができない」が露呈～

○及川海相「その決（対米開戦）は総理が判断してなすべきものなり。もし外交でやり戦争をやめるならばそれでもよし」

○東條陸相「総理が（戦争をしないと）決心しても陸軍大臣としてはこれに盲従は出来ない。吾輩が納得スル確信でなければならない」「御前会議で決定したような外交交渉成立の目途があるのか、その確があるのか？」（と外相に質す）

○豊田外相「最難点は駐兵問題にあり、陸軍が譲歩（中国からの撤兵）できるなら交渉成立の見込みがないわけではない」

○近衛首相「外交か戦争かのいずれか選ぶならば、外交により大なる確信あるゆえ、これを選びたし。それにもかかわらず戦争をやると言うならば、自分としては責任はとれぬ」

○東條陸相「（今年9月御前会議で）外交交渉成立の目途なき時は開戦を決意すると決定したはずで、いまさら責任をとれぬというのは理解できない」

○豊田外相「遠慮ない話を許されるならば、（この発言は記録に残さないように呼びかけながら）、御前会議決定は軽率だった。前々日に書類をもらってやった」

○東條陸相「そんなことは困る。重大な責任でやったのだ」

（それ以降は、ほとんど感情的な議論のぶつけ合いに）

○近衛首相「戦争は一年、二年の見込はあるが、三年四年となると自信はない」

○東條陸相「そんな問題はこの前の御前会議の時に決っている」

○近衛首相が「今どちらかでやれと言はれれば、外交でやると言はざるを得ず。戦争に私は自信ない」

○東條陸相「これは意外だ。戦争に自信がないとは何ですか。それは『国策遂行要領』を決定する時に論すべき問題でせう」「（撤兵をすれば陸軍が）ガタガタニナル。吾輩は今日まで軍人軍属を統督するのに苦勞をしてきた。世論も青年将校の指導もどうやればどうなるか位は知って居る。下のものをおさへて居るので軍の意図する所は主張する」



荻窪会談（写真は開戦1年前の会談 朝日新聞社）
1940年（昭和15）に近衛文麿の東京の私邸（荻外荘）、第二次近衛内閣の組閣を任された近衛文麿が大臣就任予定者を招いて開いた

* 参考文献
「人びとの社会戦争」
増田肇著（岩波書店）

昭和天皇拝謁記

戦後の初代宮内庁長官を務めた田島道治が、戦後、昭和天皇との対話（1949年昭和24年～1953年昭和28年）を克明に記録した「昭和天皇拝謁記」（岩波書店）より

■開戦に対する見解

「私が若（も）し戦争を止めたら内乱になつていたかも知れないネー。何といつても下剋上の勢がいつの間にか出来たから」（1953〔昭和28〕年5月18日）

■示唆に富む、昭和天皇と田島氏との問答

- ・ 田島「世の中の事は理屈で平静に考へますれば問題のありませぬ事も、其場に臨みその空気、勢といふものに支配されますと随分人間は愚なものでありますので、いく所までいかなければ目がさめぬものかと感じまする」
- ・ 昭和天皇「そうだよ、戦争の場合も同様で、私など戦争を止めようと思つてもどうしても勢に引づられて了つた。近衛でもネー」
- ・ 田島「ハイ、矢張り芽生への時に勢を押へませんければ、勢が勢を作つて人力ではどうにも参らなくなります。陛下の仰せのやうに戦争の事を遡りますれば、昭和三年の張作霖事件の時に河本大作を処分しなかつた事に帰しますので、勢といふものは実に恐ろしいものであります」
- ・ 昭和天皇「そうだ、結局勢といふもので戦争はしてはいかぬと思ひながらああいふ事になつた」
- ・ 田島「終戦の際は鈴木首相が聖断を仰ぎました故、陛下が御意見を御出しになり得ましたが、時の政府も統帥部も一致して開戦を奏しますれば陛下としてどう遊ばす事も出来なかつたと思ひます」
- ・ 田島「現に二二六事件も起きておりまするので、どうも内乱になつたかと思はれます」

■天皇の二・二六事件を念頭に置いたと思われる発言

- ・ 昭和天皇「青年将校は私をかつぐけれど私の真意を少しも尊重しない。むしろありもせぬ事をいつて彼是（あれこれ）極端な説をなすものだ。マージャンなど私はしないのにそれをやるなど、いった。」

*「拝謁記」の編者の一人である河西秀哉さんもまた天皇のこの発言に注目し、二〇二三年八月一五日付の「文春オンライン」で「ここで麻雀の話が出てくるのは、そうした皇道派の青年将校たちが昭和天皇は夜な夜な麻雀をしているような遊んでいる人物であり、それを糺す必要がある、弟の秩父宮を即位させるべきと主張していたことが念頭にある」と指摘しています。

戦争のことば①

- 先の戦争では、主観的願望を客観的事実にすりかえた（保阪正康）
- 戦争しなければならない状況を作らない。それが政治家の役割（福田康夫）
- 戦争は、その姿を現す随分前から始まっているものです。おそらくは人々が口をつぐみ、物申すことをやめたときから（「暮らしの手帖」編集部）
- 間違った戦争を始めないためには、間違った戦争を生み出さない国や社会の仕組み、指導者の適切な歴史認識が前提となる。

■ なぜ、勝てない米国との戦争に慎重だった海軍が開戦に踏み切ったのか？

「私が申し上げておきたいのはねえ、私は軍令部におる間はね、感じておったことはですな、海軍が"アメリカと戦えない"というようなことを言ったことがですね、陸軍の耳に入ると、それを利用してしまおうと。」

どうということかという、海軍は今まで、その、軍備拡張のためにずいぶん予算を使ったじゃないかと、それでありながら戦えないと言うならば、予算を削っちまえ”と。そしてその分を、『陸軍によこせ』ということにでもなればですね、陸軍が今度はもっとその軍備を拡張し、それから言うことを、強く言い出すと。

（略）そういうふうになっちゃ困るからと言うんですね、一切言わないと。負けるとか何とか、戦えないというようなことは一切言わないと。こういうことなんですか」（海軍軍令部 作戦課 三代一就元大佐 戦後の海軍反省会にて）

■ 柳条湖事件は中国軍の仕業でなく日本軍の自作自演だった当時メディアも知っていた？

「のちに報道部長になる谷萩那華雄大尉というのがおりまして、記者クラブでわれわれに話してくれました。

『実は、あれ（柳条湖事件）は関東軍がやったんだよ』ということをごっそり耳打ちしてくれました」（石橋恒喜証言）

→報道機関は関東軍の謀略と知っていながら国益論から報道せず 当時は法的規制はなかった（日本人はなぜ戦争へと向かったのか NHKスペシャル）

● 多くの人が今度の戦争でだまされていたという。いくらだますものがいても、だれ一人だまされるものがなかったとしたら、今度のような戦争は成り立たなかったにちがいないのである。「だまされていた」といって平気でいられる国民なら、おそらく今後も何度でもだまされるだろう。いや、現在でも、すでに別のうそによって、だまされ始めているにちがいないのである。（伊丹万作映画監督 敗戦を受けての言葉）

戦争のことば②

■ 首相官邸に届いた「戦争せよ」との手紙 沸騰する世論

東条英機首相に届いた国民からの投書は3000通を超えた。そのほとんどが米国との戦争を望むものだった。**米国との戦争をしない東条内閣は弱腰との批判**が上がる。当時の「対米外交は強硬に出るべきか？」との世論調査では、6割以上が「強硬に出るべき」との結果（文藝春秋1940年1月号）

■ 対米戦争前の警告

米内光政元首相「ジリ貧を避けようとしてドカ貧にならぬよう注意願いたい」

■ 対米戦争への発言

海軍の永野修身軍令部総長は、開戦を手術に例え、「相当の心配はありますが、この大病を癒やすには、大決心をもって、国難排除に決意するほかありません」、「戦わざれば亡国と政府は判断されたが、戦うもまた亡国につながるやもしれぬ。しかし、戦わずして国亡びた場合は魂まで失った真の亡国である」と述べ、東条英機陸軍大臣も、近衛文磨首相に対し「**人間、たまには清水の舞台から目をつぶって飛び降りることも必要だ**」、と迫ったとされています。

（石破首相戦後80年所感より）

臼淵 磐

(うすぶち いわお)

海軍大尉

享年21才

東京府東京市青山

(現在の東京都港区青山) 生まれ

「進歩のない者は決して勝たない。負けて目覚める事が最上の道だ。日本は進歩という事を軽んじ過ぎた。私的な潔癖や徳義に拘って、本当の進歩を忘れてきた。

敗れて目覚める、それ以外にどうして日本が救われるか。今日覚めずしていつ救われるか。俺達はその先導になるのだ。

日本の新生に先駆けて散る。まさに本望じゃあないか」

(臼淵磐) — 『戦艦大和ノ最期』 吉田満著より抜粋 (原文はカタカナ)

＜新しい戦前とならないために＞

■戦争は、その姿を現す随分前から始まっているもの。人々が口をつぐみ、物申すことをやめたときから（「暮らしの手帖」編集部）

■「抗えない空気」や「やましい沈黙」が起こらない社会

■かつて日本では「外交」か、「戦争」か、となった時、外交は妥協がともなうもので弱腰批判が起こった。一方で戦争は妥協は一切無用（勝てばの話）であり支持を受けやすかった→こんな空気ができてしまったら終わり

- 厳格なシビリアンコントロール 文民統制 外交の下に軍事
- 立憲主義、議会制民主主義の確立 政治腐敗を根絶 政治の信頼
- 政府を厳しくチェックする議会やメディアと国民 政府の隠ぺいや虚偽
- 世界情勢を見誤らない広い視野とインテリジェンス
- ナショナリズムのあおりすぎによる制御不能を避ける 国際協調の意義
- 「国策を誤った」戦争の教訓を明確化し、政府と社会・教育で共有
- 権利・格差・多様性を軽んじない、同調圧力（空気の力）が強すぎず、声を上げやすい社会を



「国民抗戦必携」表紙

以上いずれも捨身で躍りかかってこそ勝利がある

三、手榴弾投擲

重量百七十匁。半徑七米有効の制式手榴弾のほか、柄付、空瓶や罐詰を應用したものがある

操作は第一に安全栓を抜いて發火を確かめ、次に平常の訓練で自身の投擲能力を給分に知ること、第三は投擲動作は極力体の露出を小さくすること

四、白兵戦闘、格闘

上背のあるヤンキーともに對する白兵格闘の要領は突きが一番だ
斬ったり拂ったりすることは腕に自信のない限り致命傷を與へることはむづかしい

刀や槍がなくとも鎌、ナタ、玄能、出刃包丁、鳶口いづれも立派な奇襲兵器だ

單獨行動の敵ならばさつと背後から打ってかかれれば必殺は容易だ、鎌の柄は三尺位が扱いよい

格闘になつたら上から襲いかかる敵に對して身を沈めて水落を突いたり拳丸を蹴上げたりする

柔道、唐手などわが國獨特の體當たり武道を發揮するのだ

〔出典〕NF文庫／ノンフィクション「国民抗戦必携」「国民築城必携」「國土決戦教令」



(出典)田島義孝子爵著「プロパガンダ・ポスターにみる日本の戦争」増補出版

拓け満蒙！
行け満洲へ！

資格

三十三歳以下（徴兵検査未了者を除く）にして
身体強壯の者

政府の
補助

一戸に付一〇〇〇圓、其他諸種の
便宜あり

↓五百万円

拓務省 移民募集
満洲農業

締切 七月十五日

申込所 町村役場、又は軍人分會

昭和十三年 満洲移住協會

東京、日比谷、大阪ビル内

令和七年三月十四日提出

対米開戦は誤った国策だったのか否か等に関する質問主意書

提出者 長妻 昭

平成十八年六月五日に私が提出した質問主意書に対し、以下のような答弁（内閣衆質一六四第三〇四号）を得た。

（質問）村山談話の「わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り」とある部分の「国策を誤り」とは、具体的には、どのようなことを指すのか。誤った国策とは例えば、対米開戦は含むのか、否か。

（答弁）お尋ねの「国策を誤り」については、個々の行為に対する評価等をめぐり様々な議論があるところ、政府として、その原因を含め、具体的に断定することは適当でないと考える。

そこでお尋ねする。

一 現在でも内閣は、先の対米開戦について、村山談話にある、誤った国策であるのか否か、は判断できないという立場なのか。

二 内閣は、今後、先の対米開戦という国策は間違っていないかった、という見解を持つこともあり得るのか。

三 戦後八十年、石破内閣は先の昭和の戦争の総括をするつもりはあるのか否か。

右質問する。

答弁書 令和七年三月二十八日

内閣総理大臣 石破 茂

衆議院議員長妻昭君提出対米開戦は誤った国策だったのか否か等に関する質問に対し、別紙答弁書を送付する。

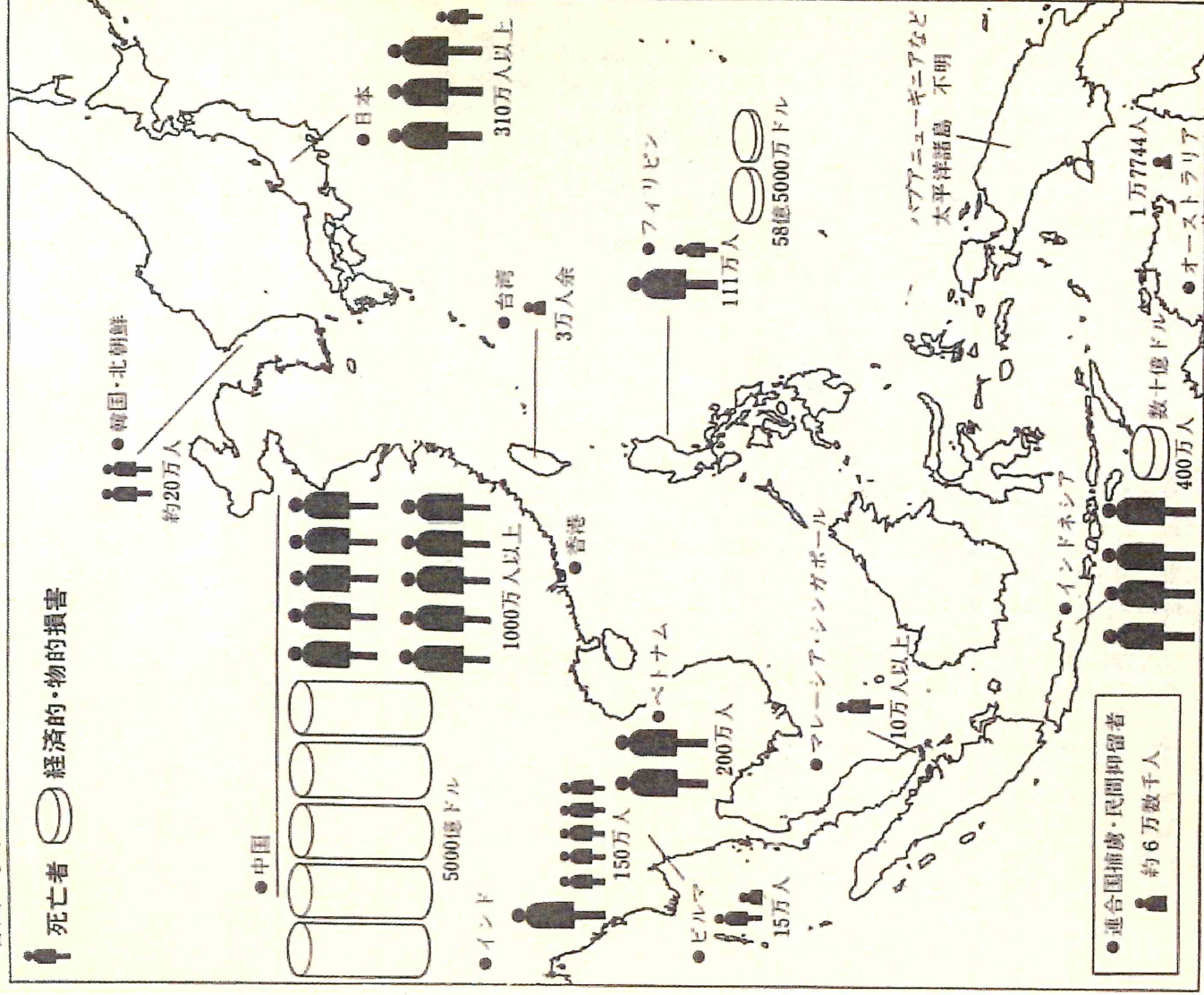
一及び二について

御指摘の答弁書（平成十八年六月十三日内閣衆質一六四第三〇四号）で示した政府の考え方に変わりはなく、お尋ねの点を含め、個別具体的な歴史的出来事に関する評価については、歴史家の議論に委ねるべきと考えている。

三について

お尋ねの「先の昭和の戦争の総括」の具体的に意味するところが明らかではなく、お答えすることは困難である。

各国の被害



注) この地図では原則として、その国・地域の政府が公式に発表した数字を用いたが、推計によるものもある。
 中国：1937-45年のみの数字（台湾を除く）。死傷者計2100万人余。台湾：1941-45年の、軍人軍属のみの数字。
 インドネシア：「飢十億ドル」の原文は、billions of dollars. インド：1943-44年のベンガル飢饉のみの数字（Famine Inquiry Commission: Report on Bengal, 1945）。350万人との推計もある。フィリピン：戦争被害の総額は80億8000万ドル。オーストラリア：死亡者のうち約8000は連合国捕虜と重複（同国大使館提供の資料）。タイおよび太平洋諸島：被害の数量は不明。（『世界』1994年2月より作成）

令和 8 年 7 月 22 日
調査及び立法考査局
外交防衛調査室・課

◆御依頼日：7 月 22 日

◆御依頼内容

戦死者よりも戦病死者や餓死者の方が多い戦争はあるか

順天堂大学名誉教授の酒井シヅ氏編の図書によると、「日露戦争が戦死、戦傷死の数が病死を上回った史上最初の戦争」であり、日露戦争より前の戦争では病死者の方が多数であったとされています（資料 1）。

日露戦争以降に関しては、第一次世界大戦下のオスマン帝国軍において、771,844 名の死傷者のうち、68,378 名が戦傷死、466,759 名が病死であったとされています（資料 2）。

また、第二次世界大戦の日本軍も、戦死者よりも病死者、餓死者が多かったとされています。一橋大学名誉教授の藤原彰氏は、第二次世界大戦の日本の「軍人の戦没者 230 万人のうち、戦死、病死などの死因別はどうなっているかについては、公式の統計はまったくない」としつつ、個別の戦場から推計した病死者、広い意味での餓死者は、全体の 60%強であったとしました（資料 3）。

【提供資料】

1. 酒井シヅ編『疫病の時代』大修館書店, 1999, pp.39-42.
2. Melanie Schulze-Tanielian, "Disease and Public Health (Ottoman Empire/Middle East)," 8 October 2014. International Encyclopedia of the First World War website <<https://encyclopedia.1914-1918-online.net/article/disease-and-public-health-ottoman-empire-middle-east/>>
3. 藤原彰『餓死した英霊たち』青木書店, 2001, pp.131-139.

担当：外交防衛課 河村拓哉（内線：衆議院から 98-22313 / 参議院から 970-22313）

令和 8 年 8 月 14 日
調査及び立法考査局
外交防衛調査室・課

◆御依頼日：8 月 13 日

◆御依頼内容

日本軍が、日本国民を殺傷したり、置き去りにして死に至らしめたり、自決を強要したりするなどの行為の一覧表の作成（できれば犠牲者数も含め）

沖縄県の県立沖縄史料編集所専門員、県教育庁文化課専門員などを務めた大城将保氏は、1988 年に出版した書籍において、沖縄戦の日本兵による住民虐殺について、「全容は明らかではない」としつつ、「現在、四十数件の事例が確認されている」としています【資料 1】。このうち、大城氏が列挙する代表的な事例を表にまとめました【資料 2】。あわせて、これらの事例の一部や、強要されたと見られる「集団自決」などについて詳細に記した資料を提供いたします【資料 3-4】。また、犠牲者について、沖縄国際大学名誉教授の安仁屋政昭氏は、「私の今まで調べたデータをもとに概算しますと、集団自決の強要・虐殺を合わせると大体六千〜八千の人がそういう形（「友軍による虐殺、拷問、集団自決の強要」）で殺されている」としています【資料 5】。

【提供資料】

1. 大城将保『沖縄戦—民衆の眼でとらえる「戦争」— 改訂版』高文研, 1988, pp.160-165.
2. 国立国会図書館調査及び立法考査局外交防衛調査室・課「日本兵による主な住民虐殺事例」令和 8 年 8 月 14 日
3. 沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 各論編 第 6 巻』沖縄県教育委員会, 2017, pp.484-533.
4. 林博史『沖縄戦と民衆』大月書店, 2001, pp.155-173.
5. 安仁屋政昭「沖縄戦における戦争体験と歴史研究」『日本史研究』129 号, 1972.11, pp.27-38.

担当：外交防衛課 河村拓哉（内線：衆議院から 98-22313 / 参議院から 970-22313）

令和 8 年 8 月 14 日
調査及び立法考査局
外交防衛調査室・課

日本兵による主な住民虐殺事例

発生場所	事例の概要
知念村	球部隊に陣地構築用の松材を納入した木材ブローカーが、「資材を提供するのは当然だ」と代金の支払いを拒否され、押し問答の末に射殺された。
知念村	日本兵の横暴なふるまいを注意した人物が、反軍的態度が非国民とみなされ銃殺刑となった。
国頭郡宜野座	南米移民から帰国した人物が斬殺された。スペイン語が話せるため、危険分子と見られていた。
久志村	収容所で米軍の洗濯作業に使役されていた女性 40 名が山から下りてきた日本兵に連行された。日本兵は浜辺で女性らに焚火を囲ませ、そこに手りゅう弾を投げた。数人が即死した。
名護町許田	ハワイ移民帰りの人物とその弟が斬殺された。北部山中に立てこもる護郷隊はスパイ取締りに暗躍しており、海外移民帰りに目をひかせていたという。
伊豆味	耳が遠く、敵機が襲来していることに気が付かず、宇土部隊の本部壕付近を徘徊していた本部国民学校の校長が、敵機を誘導するスパイと見なされ射殺された。
久米島	久米島郵便局の局員が米軍の捕虜になり、米軍の使いで鹿山隊に投降勧告状を届けに行ったところ、その場で殺された。
久米島	米軍上陸時に捕虜になった 9 名は、その日のうちに帰宅を許されたが、2 日後に鹿山隊に射殺された。遺体は、遺体が集められた家ごと焼き払われた。
久米島	沖縄本島で捕虜になった人物は、郷里の久米島が無防備であることを説明し、艦砲射撃を中止させた。終戦後に米軍とともに久米島に渡り、住民に終戦を伝えていたところ、鹿山隊に親子 3 名とも捕まり、手りゅう弾で殺された。
久米島	朝鮮出身の一家 7 名が、身に覚えのないスパイ容疑をかけられ、日本刀で斬殺された。

(資料 2)

大宜味村渡野喜屋	中南部から避難してきた住民約 90 名が米軍に捕まり保護されていたところ、日本兵約 10 名が山から下りてきて、リーダー格の男たち数名を山の中に連行して斬殺した。残りの婦女は浜辺に集められ、手りゅう弾により 25 名が死亡し、15 名が重傷を負った。後に米兵が現場を検証したところ、米軍から支給されていた食糧や毛布類が持ち去られていた。
国頭郡	首里から疎開していたハワイ帰りの人物は、中学一年生くらいの孫を日本兵に射殺された。2 世で英語が話せたため、スパイの容疑をかけられたと見られている。
大宜味村喜如嘉	捕虜になった人物が収容所を脱走して村へ帰ってきたところ、敗残兵グループにスパイの疑いをかけられ、日本刀で斬殺された。
渡嘉敷島	スパイ容疑をかけられた人物が斬殺された。実は食糧の問題が原因だったと見られている。
渡嘉敷島	集団自決で妻子を失い、放心状態で山野をさまよっていた人物が斬殺された。
渡嘉敷島	伊江島から連行され、難民収容所に収容されていた女性 5 名、青年 1 名が、米軍の使者として赤松隊に降伏勧告状を届けに行ったところ、スパイ容疑で捕らえられた。各自の墓穴を掘らされた上、軍刀で斬首された。
渡嘉敷島	16 歳の少年 2 名が集団自決で重傷を負っていたところ、米軍に救助され、治療を受けた。その後、米軍の命令で住民避難地区に連絡に行く途中で赤松隊に捕らえられ、スパイ容疑で斬殺された。
渡嘉敷島	防衛召集を受けて赤松隊に配属されていた国民学校の教頭が、妊娠中の妻の安否を気遣い、住民避難地区に出入りしていたところ、敵前逃亡の罪状で処刑された。
渡嘉敷島	敗戦の翌日の 8 月 16 日、防衛隊員 2 名が米軍の命令で赤松隊に降伏勧告状を届けに行ったところ、捕らえられて斬殺された。
座間味島阿佐部落	何者かに斬殺された死体が部落の路上で発見された。
伊江島	米軍に保護された住民 5 名が日本軍の残存兵に連行された。後に部落の外れの野原で 5 名の遺体が発見された。銃殺と見られている。
金武村	那覇から疎開していた人物が、アメリカ製の空缶を所持していたとの理由で海軍の下士官によって斬殺された。
国頭郡今帰仁村	警防団長であった人物が海軍特殊潜航艇隊の隊員たちに連行され、翌朝、近くの畑の中で斬殺死体となって発見された。
国頭郡今帰仁村	部落の英語通訳を務めていた人物が何者かに斬殺された。
国頭村今帰仁村	男性と、その妻と弟の 3 名が日本兵に連行されて斬殺された。
玉城村系数	ガマで“持久戦”を続けていた敗残兵のグループは、地上の収容地区の住民が食糧を探しに来ると、敵を誘導するスパイとみなして壕内から無差別に攻撃した。地元住民だけでも 5、6 名が犠牲となった。

(出典) 大城将保『沖縄戦—民衆の眼でとらえる「戦争」— 改訂版』高文研, 1988, pp.160-165.を基に作成。